

地域情報（県別）

【長野】「地域医療のメッカ」佐久市の魅力を「地蔵健診」でPR-井上剛・佐久市担当課係長、坂本昌彦・佐久総合病院医師らに聞く ◆Vol.1

2020年3月20日 (金)配信 m3.com地域版

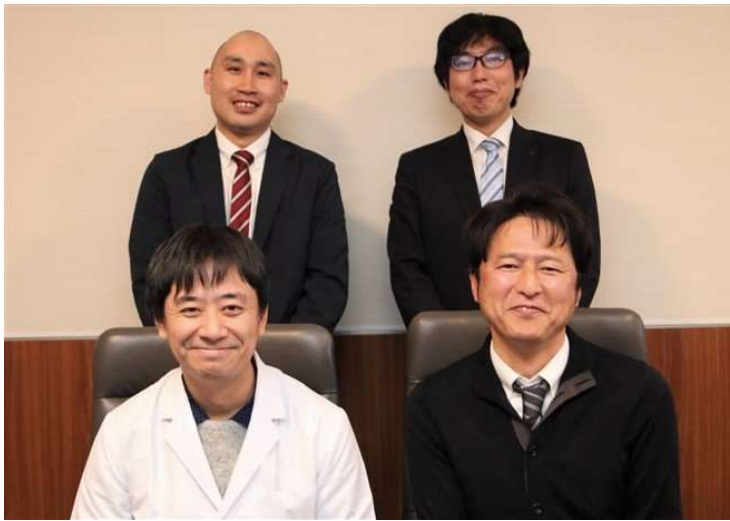
医療が充実した地域であることを首都圏の人にも知ってもらいたい——。長野県佐久市が1月から、観光資源である「ぴんころ地蔵」を活用したユニークなプロモーション活動「地蔵健診」を行っている。取り組みの内容や始めた経緯について、事業を担当する佐久市経済部移住交流推進課交流推進係長の井上剛氏と静谷隆士氏、市の地域医療事務を担当する市民健康部健康づくり推進課保健医療政策係長の小林英樹氏、事業に協力するJA長野厚生連佐久総合病院小児科医長の坂本昌彦氏に聞いた。（2020年2月14日インタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら

——まずは、「地蔵健診」という取り組みの概要についてお聞かせください。

井上 地蔵健診は佐久市が行うシティプロモーションの一環で、医療をテーマに佐久市の魅力を首都圏に発信しているというものです。

具体的には、市の観光資源である「ぴんころ地蔵」のレプリカを作成、佐久市とゆかりのある東京都内の店や佐久市の施設に置き、地蔵にお祈りした人は医療に関するお告げを聞けたり、おみくじを引いたりできるというもの。ぴんころ地蔵のツイッターアカウントも開設し、フォローしてくれた人が手を合わせた絵文字を送ってくれたら、医療に関するお告げが返信される、という取り組みも行っています。



左上から静谷隆士氏、小林英樹係長、坂本昌彦医長、井上剛係長

——なぜ、こうした取り組みを始めたのですか？

井上 佐久市の魅力を県外の、特に首都圏の方々に知ってもらい、興味を持ってもらいたいためです。ひいては佐久市への移住を促したい考えがあります。

佐久市も現在、他の地方の自治体と同様に、人口減少が大きな課題となっています。国勢調査によると、佐久市の人口は2010年までは緩やかに増えていましたが、同年の10万552人をピークに減少に転じ、2015年は9万9368人、住民基本台帳によれば、2019年10月1日現在は9万8957人と緩やかに減り続けています。国立社会保障・人口問題研究所によると、今後は減少幅が大きく広がり、2040年には8万6000人ほどにまで落ち込むと推測されています。

人口が減れば経済が縮小し、経済が縮小すれば行政サービスを始めさまざまな社会基盤の維持が困難になると想像されますから、いかに市外への人口流出を抑え、市外から人を呼び込むかが市としては喫緊の課題であるわけです。

——そこで、生産年齢人口を増やすための施策を打ちたいと。

井上 はい。地方移住を支援するNPO法人「ふるさと回帰支援センター」が2019年度に行った調査では、相談のおよそ7割が20～40代からであり、また、相談者の出身地の割合は関東地区が45.1%と突出、うち上位4位を東京、埼

玉、千葉、神奈川が占めていたといえます。市でも同じエリアに住む20～40代の約2万人を対象にインターネット調査を行ったのですが、およそ4人に1人が移住を検討していることが分かりました。

これらのことからシティプロモーションの対象を定めたわけですが、では何をやるか。先ほど挙げた市の調査で、移住を検討している佐久市のことも知っている約1000人に「移住先を選ぶ上で重視すること」を聞いたところ、「保健・医療・福祉の充実」を挙げる一方、佐久市についてはこれらのイメージがない、という結果が出ました。

佐久市は医療が充実した町だと私たちは考えていて、「健康長寿の町」としてメディアから報道されることもありますが、実際のところ、首都圏の若い人にはあまり知られていないことが分かったのです。そこで、医療を絡めて情報発信をしていこうと考えました。



「地蔵健診」に活用する「びんころ地蔵」のレプリカ

——私も「佐久市は健康長寿の町」と聞いたことはありますが、なぜそう言われているのでしょうか。

坂本 一般の人の認知度は低いかもしれませんが、医療関係者には佐久市は「地域医療のメッカ」だと言われています。そんな評判が広まっていったのは、1946年に院長に就任した故・若月俊一先生（1910－2006）の功績が大きく影響しています。

若月先生は医療の発展に貢献する数々の先駆的な取り組みを行いました。「農民とともに」を合言葉に無医村への出張診療を始め、診療後は演劇やコーラスを交えた村民への健康教育を実施。さらに1959年には全国で初めて旧八千穂村で住民健診を行いました。これは病院と行政が協力し、全村民の健康度をチェックするものだったそうです。また、病院給食、つまり入院患者への定期的な食事の提供も全国で初めて実施し、さらに患者への恐怖感を和らげようと手術室の一般公開も一時的に行っていたと聞きます。

総じて、「佐久市は総合診療や在宅医療、健康診断のモデルが築かれた地域」と言っても過言ではないのではないのでしょうか。

小林 数字でも健康度の高さを確認できます。厚生労働省が2018年に発表した「2015年市区町村別生命表」によると、佐久市の女性の平均寿命は88.4歳であり、これは全国の市区町村1888の中で11番目に高い結果となりました。また、佐久市の調査によると、2017年における佐久市の健康寿命は男性が80.4歳、女性が85.4歳であり、国平均の男性79.6歳、女性84.0歳を共に上回りました。

◆井上剛（いのうえ・つよし）氏

佐久市経済部移住交流推進課交流推進係長

◆坂本昌彦（さかもと・まさひこ）氏

JA長野厚生連佐久総合病院小児科医長

◆小林英樹（こばやし・ひでき）氏

佐久市市民健康部健康づくり推進課保健医療政策係長

◆静谷隆士（しずや・たかし）氏

佐久市経済部移住交流推進課交流推進係

【取材・文・撮影＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

